

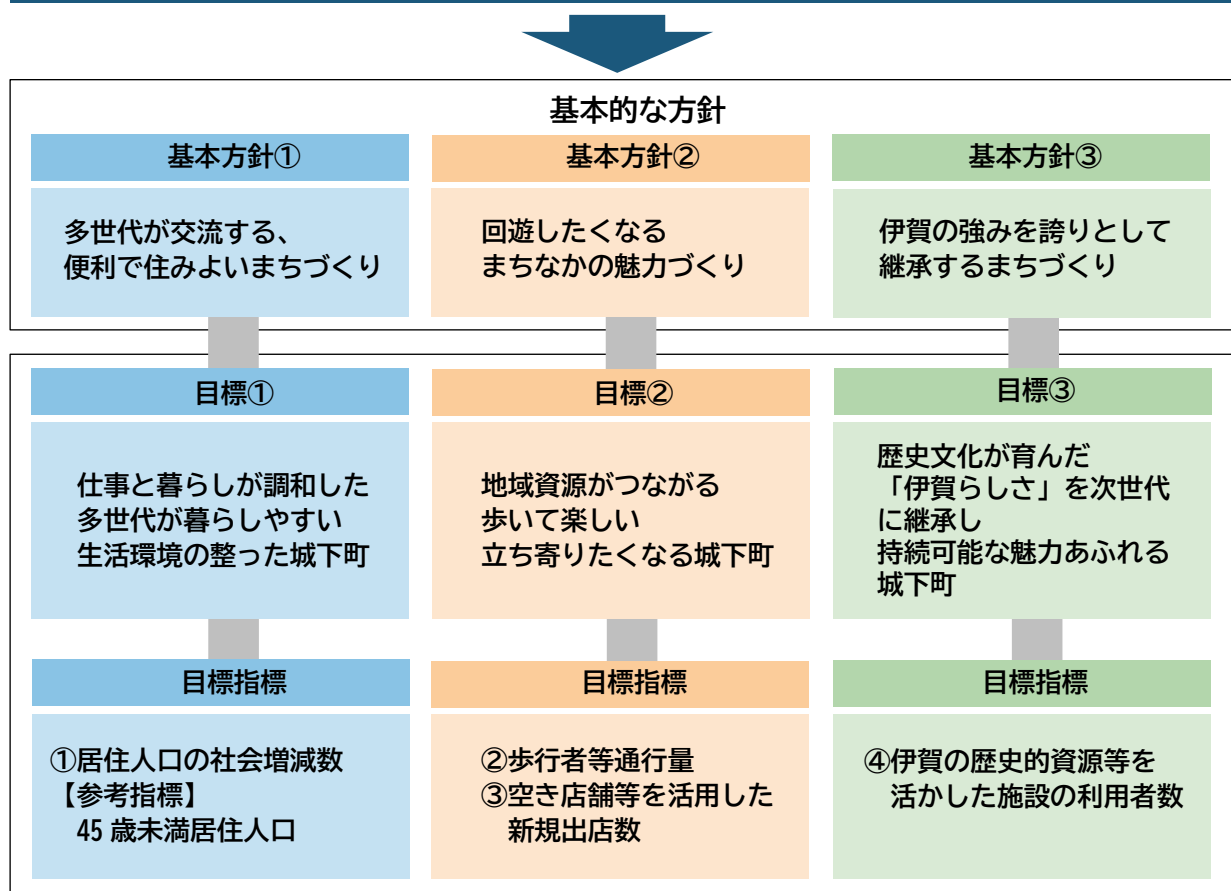
3. 中心市街地活性化の目標

[1] 中心市街地活性化の目標

「城下町伊賀上野の文化・風土を市民で守り、次世代につなげ、新たなにぎわいを創出する」ことを目指し、基本方針に基づき、次のとおり目標を設定する。

【テーマ】

城下町伊賀上野の文化・風土を市民で守り、
次世代につなげ、新たなにぎわいを創出する。



目標① 仕事と暮らしが調和した 多世代が暮らしやすい 生活環境の整った城下町

- 目標①－１ 仕事と暮らしが調和した

商業地域と居住地域が調和し、多くの人が暮らし、地域内で働ける場がある城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ まちなかの人口減少が著しい
- ・ 空き店舗が増加している
 - 店舗と住居が分離していない、改修費が高額、貸し渋り

- 目標①－２ 多世代が暮らしやすい

教育機能や子育て施設が充実し、都市機能や生活機能が集積した、子育て世代も高齢者世代も快適な暮らしができる城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ まちなかの人口減少が著しく、高齢化率も高い
- ・ 若者世代のＵターン^５志向が低い、中心市街地から出ると戻ってこない
- ・ 空き店舗が増加し、生活機能が低下している

- 目標①－３ 生活環境の整った城下町

歩いて生活できる、生活環境の整った、市の経済活動の基盤となる城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ まちなかの人口減少が著しい
- ・ 空き店舗が増加し、生活機能が低下している
- ・ 小売商業の郊外化・大型化が進み、中心市街地の利便性の低下や商業活動の縮小が進んでいる
- ・ 公共交通の利便性が低下している

目標② 地域資源がつながる 歩いて楽しい 立ち寄りたくなる城下町

- 目標②－１ 地域資源がつながる

まちの資源がつながることで、歴史的資源・観光資源の情報を広く発信できる城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ まちなかには多くの資源があるが、情報発信が不十分
- ・ 資源が点在している、導線が定まっていない

^５ Ｕターン：地方出身者が都市部へ移住したあとで、再び地方へ帰ること。

- **目標②－２ 歩いて楽しい**

美しい城下町の景観が保たれた魅力的なまちなみが広がり、伊賀の歴史的資源を活用したメニューが豊富にある、歩いて楽しい城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ 空き店舗が多く、活気がない
- ・ 観光客がぷらっと立ち寄れる拠点が少ない

- **目標②－３ 立ち寄りたくなる城下町**

城下町のまちなみが残る伊賀の歴史・文化を活かした施設を訪れるように、ぷらっと立ち寄り、宿泊したくなる城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ 空き店舗が多く、活気がない
- ・ 観光客がぷらっと立ち寄れる拠点が少ない
- ・ 城下町の景観が崩れつつある
- ・ 歴史・文化の発信が十分でない

目標③ 歴史文化が育んだ「伊賀らしさ」を次世代に継承し 持続可能な魅力あふれる城下町

- **目標③－１ 歴史文化が育んだ「伊賀らしさ」を次世代に継承し**

子ども時代からまちなかに足を運び、愛着を持つことで、伝統文化を受け継ぐ次世代が育成される城下町を目指す。

【背景・課題】

- ・ 少子高齢化により、伝統文化の継承が困難になっている
- ・ まちの魅力の低下により、周辺地域の若者世代がまちなかへ足を向けなくなっている

- **目標③－２ 持続可能な魅力あふれる城下町**

市民全員がまちの良さを実感し、まちなかから周辺地域へ活性化の効果が波及することで、伊賀市の持続可能性を高める基盤となる城下町＝中心市街地を目指す。

【背景・課題】

- ・ まちの魅力の低下により、周辺地域の若者世代がまちなかへ足を向けなくなっている
 - ・ 周辺地域との連携不足により、波及効果が現れない可能性がある
 - ・ 中心市街地活性化の必要性が認識されていない
 - 中心市街地活性化は市の発展に寄与する
 - 中心市街地外の人のもとより、中心市街地内の人も認識できていない
-

[2] 計画期間の考え方

計画期間は、2025（令和7）年4月から事業の効果が現れると見込まれる 2030（令和12）年3月までの5年間とする。

[3] 目標指標の設定の考え方

目標の達成状況を的確に把握できるよう、それぞれ以下の目標指標を設定する。

目標① 仕事と暮らしが調和した 多世代が暮らしやすい 生活環境の整った城下町

目標指標①：中心市街地における居住人口の社会増減数

<定義>

中心市街地の居住人口の社会増減数（転入者数－転出者数）

<設定理由>

中心市街地の活性化には、まず「人がそこに住んでいること」が大前提であり、市民ワークショップでもそのような意見が多く得られたことから、まちなか居住の推進が把握できる「中心市街地における居住人口の社会増減数」を目標指標として設定する。

参考指標：中心市街地の45歳未満居住人口

<定義>

中心市街地の45歳未満居住人口

<設定理由>

中心市街地の活性化に向けては、市民ワークショップの結果などから、若い人が住み、働き、交流することでまち自体が若返ることも期待されていることが分かった。本計画では、まちなかの空き家の利活用や子育てを支える環境づくりなどにより、多世代が便利で暮らしやすいまちなか居住の促進を目指している。

これらのことから、まちなか居住推進の事業効果における若い世代の増加の効果を捉えやすくするため、「中心市街地の45歳未満居住人口」を参考指標として設定する。

目標② 地域資源がつながる 歩いて楽しい 立ち寄りたくなる城下町

目標指標②：中心市街地の歩行者等通行量

<定義>

中心市街地の歩行者等通行量の合計値

歩行者等通行量の測定箇所は以下の9箇所15地点とする。

ハイトピア伊賀、新天地南口前、上野本町通郵便局前、まちやガーデン伊賀前、丸之内交差点、白鳳門前、岡三証券前、銀座中央駐車場前、忍者体験施設前

<設定理由>

本計画では、中心市街地の活性化に向けて、旧上野市庁舎を拠点としたにぎわい忍者回廊の整備や、「伊賀マルシェ」をはじめとするイベント開催による魅力創出などにより、まちなか周遊の促進を目指すとともに、まちなかへの出店を希望する新規事業者への支援などにより、経済面でもまちなかの活力向上を目指している。

これらのことから、その効果を把握するために、中心市街地を回遊する利用者の増加を端的に把握できる「中心市街地の歩行者等通行量」を目標指標として設定する。

目標指標③：空き店舗等を活用した新規出店数

<定義>

空き店舗等を活用した新規出店数

<設定理由>

市民アンケート結果では、市民が感じる中心市街地の課題として、「空き店舗や空き家が多く活気がない」という意見が8割近くとなっており、高校生は、「行きたい店や施設がない」と約6割が感じている。中心市街地の経済活力の向上やにぎわい創出には、これらを活用した商業機能の充実が不可欠である。また、空き店舗等を活用することは、このエリアの魅力である城下町の風情の維持にも重要である。

これらのことから、新たな事業活動の動きを継続的に把握することができる「空き店舗等を活用した新規出店数」を目標指標として設定する。

なお、空き店舗だけでなく、空き地に新たに建築された店舗や、建替えにより新規開店した店舗等、既存の空き家・空き店舗活用によらない新規出店も計測対象とすることで、中心市街地の商業機能自体の維持・活性化の状況を把握する。

目標③ 歴史文化が育んだ「伊賀らしさ」を次世代に継承し
持続可能な魅力あふれる城下町

目標指標④：伊賀の歴史的資源等を活かした施設の利用者数

<定義>

伊賀の歴史的資源等を活かした施設の利用者数

歴史的資源等を活かした施設は、以下の13施設とする。

伊賀上野城、伊賀流忍者博物館、だんじり会館、蓑虫庵、芭蕉翁記念館、芭蕉翁生家、
旧小田小学校本館、伊賀伝統伝承館、赤井家住宅、史跡旧崇広堂、入交家住宅、
忍者体験施設、新図書館

<設定理由>

伊賀市の中心市街地の魅力は市民にも来訪者にも「歴史や文化を感じるまちなみ」と認識されており、これからも守っていくべき資源である。

本計画では、ユネスコ無形文化遺産に登録された国指定重要無形民俗文化財「上野天神祭のダンジリ行事」やライトアップイベント「お城のまわり」など中心市街地の歴史・文化的資源を利活用したイベントの開催や、伊賀産品魅力向上・発信事業などにより、市民や来訪者に伊賀の素晴らしさを再発見してもらうとともに、周知を図ることで、市民間での伊賀らしさの共有・継承していくことを目指している。

これらのことから、伊賀の歴史や文化の浸透を把握するため、「伊賀の歴史的資源等を活かした施設の利用者数」を目標指標として設定する。

[4] 数値目標の設定

中心市街地活性化の目標の達成状況を的確に把握するため、各目標について、数値目標を以下の通り設定する。

基本方針	目標	目標指標	基準値※1 (基準年)	第3期計画 目標値※2 (目標年)
多世代が交流する、 便利で住みよい まちづくり	仕事と暮らしが調和した 多世代が暮らしやすい 生活環境の整った城下町	中心市街地における 居住人口の 社会増減数	-52 人 (H25～R5 累計)	+50 人 (R7～R11 累計)
		【参考指標】 中心市街地の 45 歳未満居住人口	2,686 人 (R5)	2,730 人 (R11)
回遊したくなる まちなかの 魅力づくり	地域資源がつながる 歩いて楽しい 立ち寄りたくなる城下町	中心市街地の 歩行者等通行量	5,795 人／日 (R5)	7,800 人／日 (R11)
		空き店舗等を 活用した新規出店数	25 件 (R1～R5 累計)	35 件 (R7～R11 累計)
伊賀の強みを 誇りとして 継承するまちづくり	歴史文化が育んだ 「伊賀らしさ」を 次世代に継承し持続可能な 魅力あふれる城下町	伊賀の歴史的資源等 を活かした 施設の利用者数	364,395 人／年 (R1)	693,000 人／年 (R11)

※1 基準値：最新の実績値

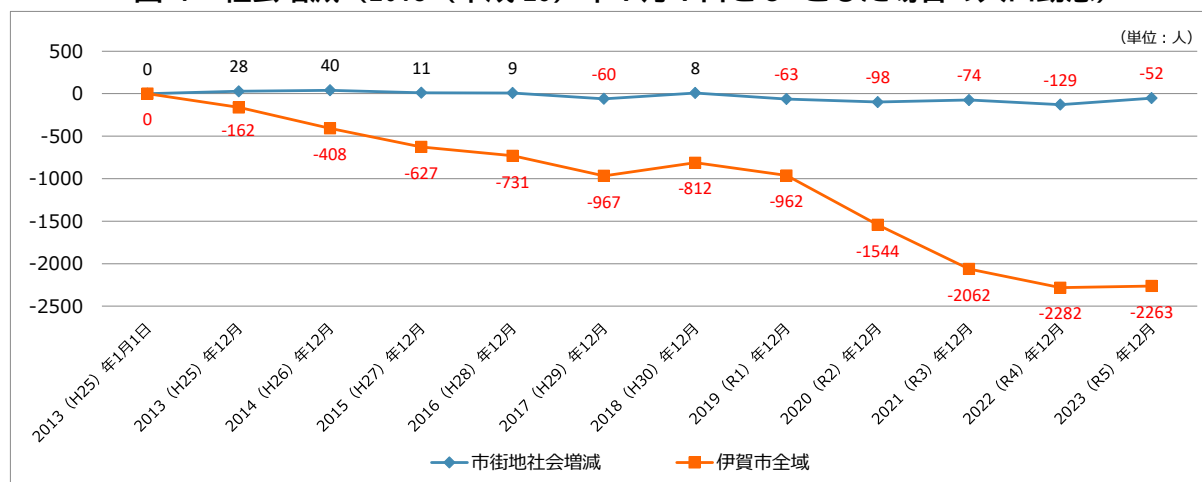
※2 目標値：トレンド推計による設定を基本とし、計画期間中に取り組む事業効果を反映した値

目標指標① 中心市街地における居住人口の社会増減数

1) 目標値の設定

中心市街地における 2013（平成 25）年からの居住人口の社会増減数の動向をみると、市全体の動向と同様に減少の一途をたどっている。

図 7 社会増減（2013（平成 25）年 1 月 1 日を 0 とした場合の人口動態）



2013（平成 25）年から 2023（令和 5）年までの中心市街地の社会増減数の累計は－52 人となっており、1 年間に平均約 5 人のペースで社会減が進んでいる。この －52 人 を、基準値として設定する。

$$-52 \text{ 人} \div 11 \text{ 年間 (2013 (H25) \sim 2023 (R5))} = \underline{-5 \text{ 人}}$$

活性化の取組を行わなかった場合、今後も同様のペースで社会減が進み、2024（令和 6）年から 2029（令和 11）年の 6 年間で、30 人の社会減となることが予測される。

$$-5 \text{ 人} \times 6 \text{ 年間 (2024 (R6) \sim 2029 (R11))} = \underline{-30 \text{ 人}}$$

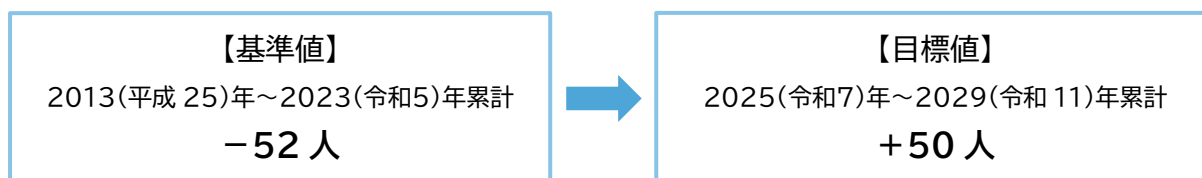
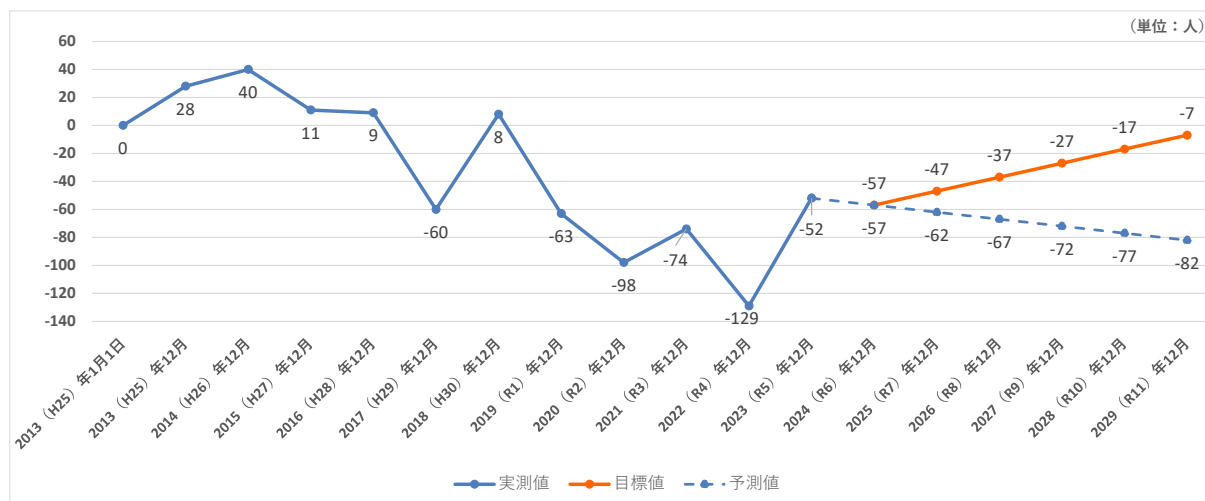
一方で、中心市街地は市全体に比べて、居住人口の社会減の進行が緩やかである状況も見えてとれる。これは、第 2 期計画での取組の効果が徐々に発現しているものと考えられる。

今後も、多世代が交流する便利で住みよいまちづくりのための取組を引き続き行っていくことで、社会減の進行を緩やかにし、社会増に転じることを目指していく。

これらを踏まえ、第2期計画と同様、年間10人の社会増を目指すことを目標とし、2025（令和7）年から2029（令和11）年の5年間で、中心市街地における居住人口の社会増減数の累計を+50人とすることを目標値として設定する。

$$10 \text{ 人} \times 5 \text{ 年間 (2025 (R7) \sim 2029 (R11))} = \underline{50 \text{ 人}}$$

図8 社会増減の予測値と目標値



2) 関連する各事業

○まちなか空き家居住支援事業

まちなか空き家の活用を推進する事業を実施することにより、居住人口の増加に寄与する。

○伊賀市空き家対策総合支援事業

空き家等の再生・除却を推進することにより、生活環境が整い、居住人口の増加に寄与する。

○移住コンシェルジュ事業

移住コンシェルジュによる総合的なサポートや、ホームページでの効果的な情報発信により、移住者数の増加に寄与する。

○子育て支援事業

子育て世代が交流できる場を開設するなど、子育てしやすい環境を整えることにより、若年世代人口の増加に寄与する。

○伊賀市合併処理浄化槽設置整備事業

汲み取り式便槽や単独処理浄化槽から合併処理浄化槽への切り替えを促進することにより、生活環境が整い、居住人口の増加に寄与する。

○町家等修理修景事業及び助成事業

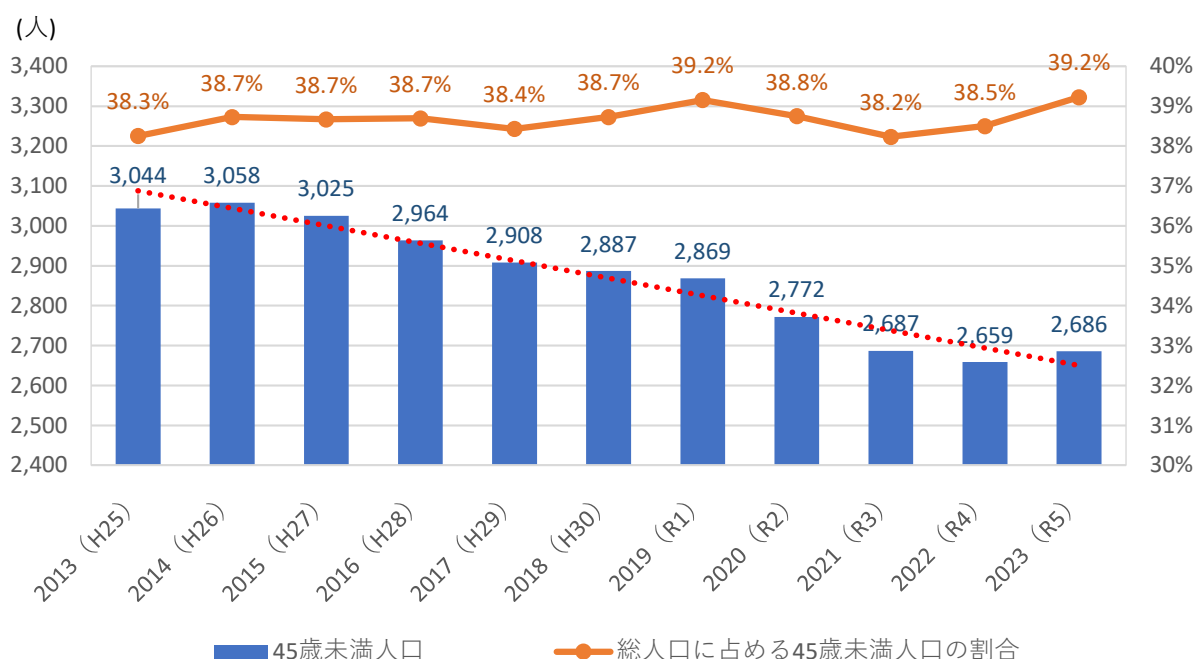
城下町の景観形成に寄与する建築物に対し費用を助成することにより、まちなか居住がしやすい環境を整える。

参考指標 中心市街地の45歳未満居住人口

1) 目標値の設定

2013（平成25）年から2023（令和5）年にかけての約10年間で、中心市街地の45歳未満人口は400人近く減少しており、直近の2023（令和5）年では2,686人となっている。この2,686人を、基準値として設定する。

図9 中心市街地の45歳未満人口の推移



2013（平成25）年から2023（令和5）年の人口推移をもとに対数近似⁶を行ったところ、2029（令和11）年の45歳未満居住人口は、2,646人となると予測される。

目標指標①では、2025（令和7）年から2029（令和11）年の5年間で累計50人の社会増を目指すこととしている一方、中心市街地においては、全人口に占める45歳未満人口の割合は概ね38～39%程度で推移している。

そこで、50人のうち約40%にあたる数が45歳未満人口であると仮定し、5年間で21人の45歳未満居住人口を増加させることを目指していく。

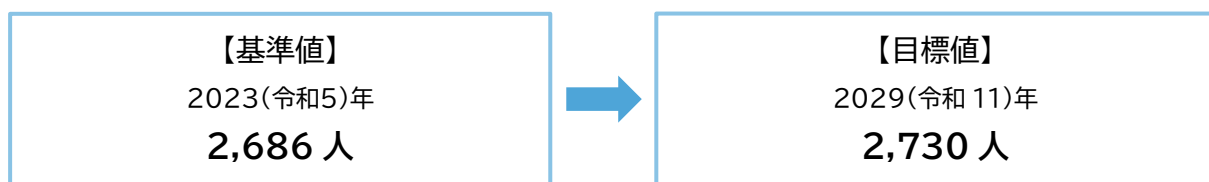
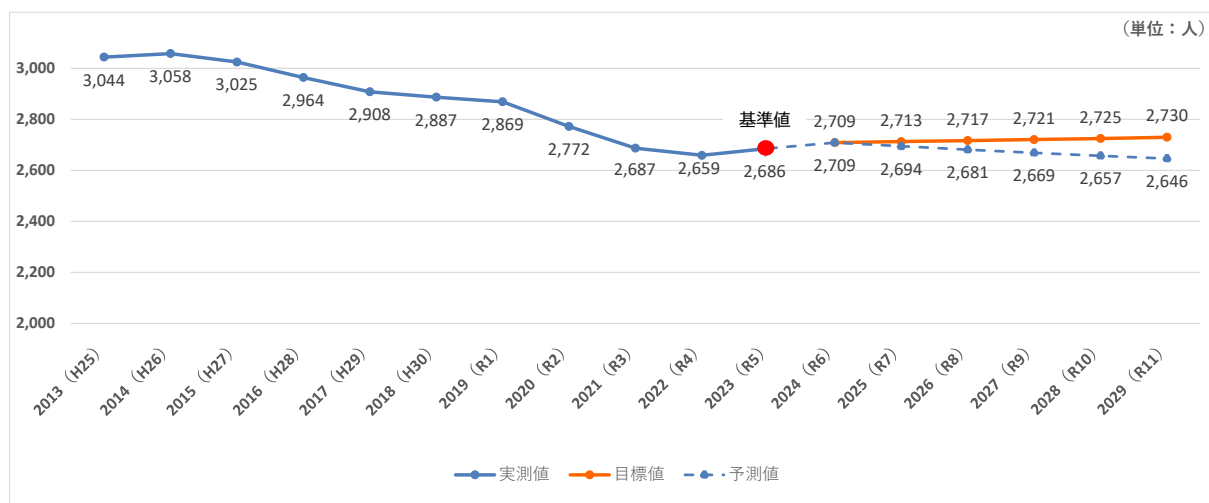
$$50 \text{ 人} \times 40\% \div \underline{21 \text{ 人}}$$

基準値は2023（令和5）年の2,686人であるが、2024（令和6）年の予測値は2,709人であり、そこから21人を増加させた2,730人を目標値として設定する。

⁶ 対数近似：データの傾向を、対数関数を用いて近似すること

3. 中心市街地活性化の目標

図 10 45 歳未満居住人口の予測値と目標値



2) 関連する各事業

目標指標①と同様の事業を実施することにより、45 歳未満居住人口の増加を目指す。

目標指標② 中心市街地の歩行者等通行量

1) 目標値の設定

◎ビッグデータによる計測

既存の通行量調査は目視による計測を行っていたが、本計画をより戦略的に進めるため、スマートフォンのGPS機能を活用した人流測定システム「Datawise Area Marketer」から得られるビッグデータ※¹により、歩行者等通行量※²の分析を行う。

- ※1 NTTドコモのスマートフォン標準アプリ（my daiz）から得られる位置情報ビッグデータを取得し、国勢調査人口を用いた独自の拡大推計を行い、実際に訪れた人数を推定したデータ
- ※2 調査地点の1時間ごとのユニーク人数
 - 例① Aさんが調査地点アを10:10、10:30に通過した場合、10時台に1人としてカウント
 - 例② Aさんが調査地点アを10:50、11:10に通過した場合、10時台に1人、11時台に1人としてカウント
 - 例③ Aさんが調査地点アを10:10、調査地点イを10:30に通過した場合、どちらの調査地点でも10時台に1人としてカウント



- ・調査する期間や時間帯、調査ポイントを自由に設定できるため、天候やイベントの有無に結果が左右されにくく、柔軟な対応が可能である。
- ・調査日の5日後にはデータ取得が可能であるため、リアルタイムで戦略の見直しに反映させることが可能である。

【調査時期の変更】

既存の通行量調査の調査時期は、毎年7月の休日（2013（H25）年～2019（R1）年）、3月の休日（2020（R2）年～2023（R5）年）の特定の1日であったが、結果が天候やイベントの有無に左右される可能性があることから、ビッグデータの抽出時期は年間の全日とし、その1日あたりの平均値を本指標の数値とする。

【調査時間の追加】

既存の通行量調査の時間帯は9時～18時の9時間であったが、早朝及び夜間の人流を測定するため、ビッグデータの抽出時間は6時～24時の18時間とする。

【調査地点の追加】

にぎわい忍者回廊整備事業をはじめとした、まちなかの回遊性向上のための事業の効果を測定するため、既存の通行量調査の6地点に加え、ビッグデータの抽出箇所を9地点追加し、計15地点における歩行者等通行量を本指標の数値とする。

◎ビッグデータに基づく予測値の補正

2020（令和2）年からのビッグデータによる計測値をもとに対数近似を行ったところ、2029（令和11）年の歩行者等通行量は、111,100人となると予測される。この数値は、前頁の注釈のとおり推定された数値であることから、より伊賀市の実態に即した数値に換算するため、既存の通行量調査で得られたデータを基準に、下記の手順によりビッグデータに基づく予測値を補正する。

- ・過去のデータ（2020（R2）～2023（R5））の各年で、実測値／ビッグデータで算出された数値を係数（下表③）として使用する。
- ・各年の係数の平均である 6.4% をビッグデータに基づく予測値に掛けたものを、補正後の予測値とする。

表 10 ビッグデータと既存データから算出した係数

	2020（R2）		2021（R3）		2022（R4）		2023（R5）		平均値
①ビッグデータ （人/日） ※月間の平均値	7月	3月	7月	3月	7月	3月	7月	3月	—
	99,676	80,775	94,077	83,370	107,109	94,885	106,622	102,609	
②既存データ （人/日） ※特定の日で計測	7月	3月	7月	3月	7月	3月	7月	3月	—
	4,623	6,868	5,015	8,490	4,807	6,788	4,242	7,348	
③係数 （②/①）	4.6%	8.5%	5.3%	10.2%	4.5%	7.2%	4.0%	7.2%	6.4%

※忍者体験施設前を除く14地点での計測データ

以上の手順により、補正後の予測値は、7,143人となった。

なお、基準値は2023（令和5）年の2回の通行量調査結果の平均値である 5,795人 と設定する。

◎新規施設の開業による事業効果

2025（令和7）年に新規2施設が開業することから、その事業効果を見込む。

【忍者体験施設】

鉄道駅や想定される駐車場との位置関係から、利用者の半数以上がいずれかの計測地点を通過することが想定される。

加えて、観光地域づくり法人である伊賀上野DMOが実施している来訪者アンケートによると、中心市街地への来街者は、平均して1.5箇所の中心市街地の施設を利用する傾向にある。これは、言い換えると、2人に1人が2箇所の施設を利用する傾向にあるということである。

これらを踏まえ、忍者体験施設の開業により、年間入館予測者数である 120,000 人と同数程度が、いずれかの計測地点を 1 回通過することを見込む。

$$120,000 \text{ 人/年} \div 365 \text{ 日} \div \underline{330 \text{ 人}}$$

【新図書館】

新図書館を利用する市民は、駐車場との位置関係から、ほとんどがいずれの計測地点も通過しないことが想定される。

一方、観光地域づくり法人である伊賀上野 DM0 が実施している来訪者アンケートによると、中心市街地への来街者は、平均して 1.5 箇所の中心市街地の施設を利用する傾向にある。これは、言い換えると、2 人に 1 人が 2 箇所の施設を利用する傾向にあるということである。

これらを踏まえ、新図書館の年間入館予測者数である 208,418 人のうち、50%程度がいずれかの計測地点を 1 回通過することを見込む。

$$208,418 \text{ 人/年} \times 0.5 \div 365 \text{ 日} \div \underline{290 \text{ 人}}$$

◎目標値の設定

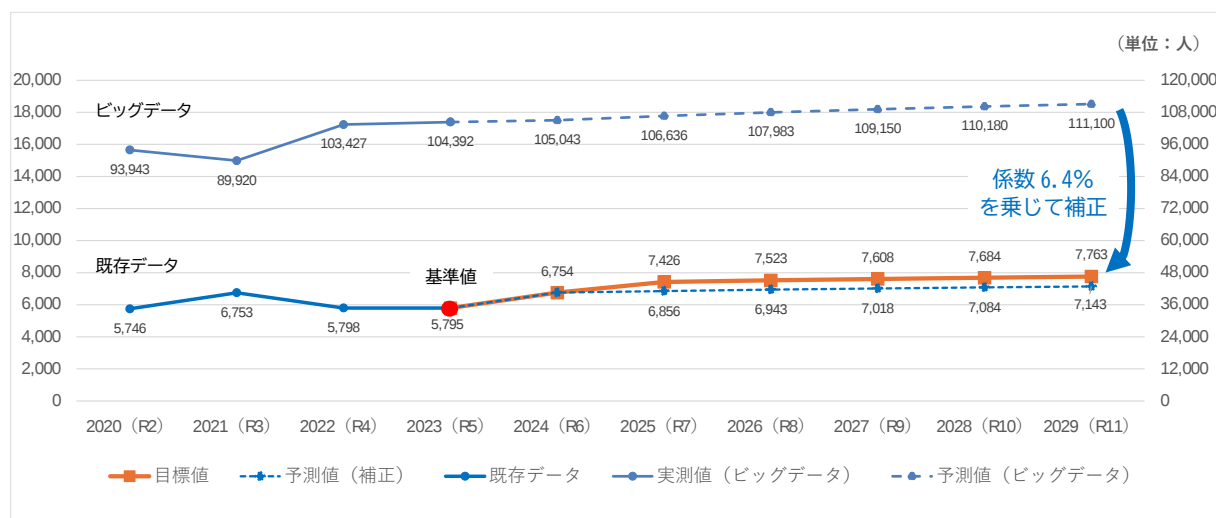
ビッグデータからの補正後の予測値に、新規施設の開業による効果を反映させる。

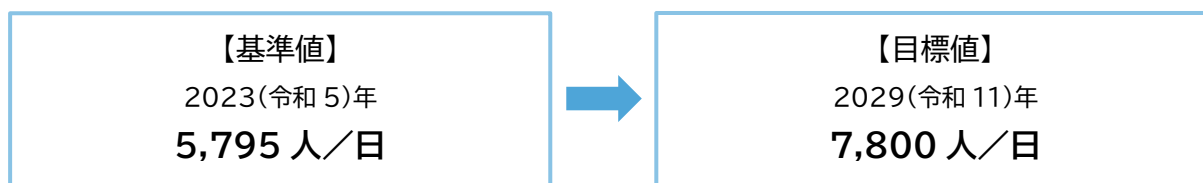
$$(\text{予測値}) 7,143 \text{ 人} + (\text{新規施設による事業効果}) 330 \text{ 人} + 290 \text{ 人} = \underline{7,763 \text{ 人}}$$

7,763 人の 10 人未満の値を四捨五入した **7,800 人** を、本指標の目標値として設定する。

(参考：ビッグデータに割り戻した場合：120,743 人)

図 11 中心市街地の歩行者等通行量の予測値と目標値





2) 関連する各事業

○旧上野市庁舎運営活用事業

○交流型図書館運営活用事業

○忍者体験施設運営活用事業

○にぎわい忍者回廊エリアマネジメント事業

「にぎわい忍者回廊整備事業」でにぎわいづくりの拠点として整備した施設を運営・活用することにより、まちなかへの来街者数の増加に寄与する。

○城下町回遊性向上のための方策検討事業

上野公園エリアと上野市駅・城下町エリアの回遊性を高める南北の導線を整備することにより、にぎわい忍者回廊整備による集客効果を中心市街地エリア全体へと波及させる。

○にぎわい拠点創出事業

白鳳プラザを地域コミュニティやチャレンジショップの場として活用することにより、まちなかへの来街を促進し、歩行者等通行量の増加に寄与する。

○新まちなか市「伊賀マルシェ」開催事業

駅前広場を活用したマルシェを開催することにより、まちなかへの来街を促進し、歩行者等通行量の増加に寄与する。

目標指標③ 空き店舗等を活用した新規出店数

1) 目標値の設定

2019（令和元）年度から 2023（令和 5）年度の空き店舗等活用件数の累計は 25 件であり、1 年間で平均 5 件の空き店舗が活用されている。この累計 25 件を、基準値として設定する。

2) 事業による効果

- ① 第 2 期計画からの継続した取組により、今後も年間 5 件程度の活用件数で推移していくことが予想される。

○伊賀市起業・経営革新促進事業

空き家・空き店舗を活用して起業する事業者へ支援を行う。

毎年 3 件の活用が見込まれることから、5 年間で 15 件の新規出店が見込まれる。

○空店舗等情報システム整備及びコンサルタント事業

中心市街地の空き店舗物件を調査し、起業希望者へ情報を提供する。

毎年 1 件の活用が見込まれることから、5 年間で 5 件の新規出店が見込まれる。

○伊賀市合併処理浄化槽設置整備事業

中心市街地の店舗に対し、合併処理浄化槽設置に対する補助金を交付する。

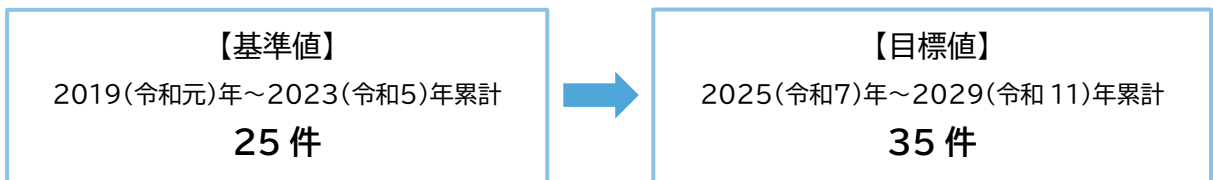
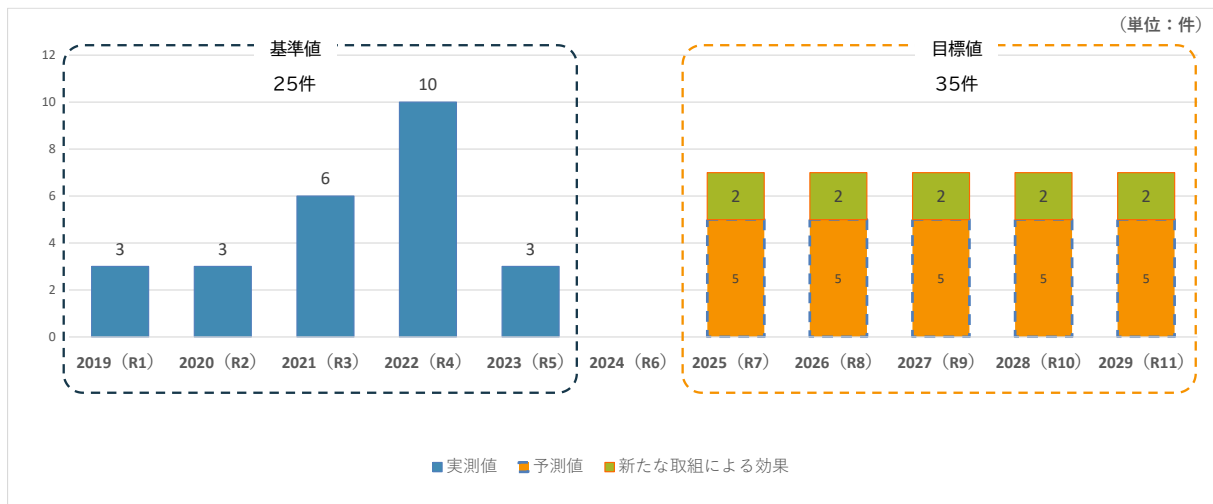
毎年 1 件の活用が見込まれることから、5 年間で 5 件の新規出店が見込まれる。

- ② 2025（令和 7）年度からは新たな取組を開始し、空き店舗活用によらない新規出店数も把握することとした。これにより、毎年 2 件、5 年間で 10 件の新規出店数を見込む

「①継続事業の実施による推計値 25 件」＋「②新規事業による効果 10 件」 ＝ 35 件

これらを踏まえ、2025（令和 7）年から 2029（令和 11）年までの新規出店数の目標値を、累計 35 件と設定する。

図 12 新規出店数の予測値と目標値



目標指標④ 伊賀の歴史的資源等を活かした施設の利用者数

1) 目標値の設定

2017（平成 29）年以降、施設の利用者数は緩やかに減少傾向であったが、2020（令和 2）年の新型コロナウイルス感染症の世界的な流行によって、大きく利用者数が減少した。2022（令和 4）年からは、徐々に回復傾向を見せているが、新型コロナウイルス感染症の影響がほぼ収束した 2024（令和 6）年においても、コロナ禍以前の利用者数には戻り切っていない。

【既存 11 施設】

新型コロナウイルス感染症の影響が大きかった 2020（令和 2）年から 2023（令和 5）年の実績値は推計上考慮しないこととし、コロナ禍以前の 2019（令和元）年の実績値である 364,395 人 を基準値として設定する。

2014（平成 26）年から 2019（平成 31）年及び 2024（令和 6）年の既存施設利用者数の実績値（2024（令和 6）年は見込値）をもとに線形近似⁷を行ったところ、2029（令和 11）年の予測値は、215,777 人となった。

今後も継続して事業を実施することで予測値を下回らないよう、傾向を維持していくほか、2025（令和 7）年の 2 施設の新規開業を機に、既存の周辺施設との連携を図り、まちなかの回遊性を高める事業も実施することで、新規施設の利用者が既存施設にも波及していくことを目指していく。

これらを踏まえ、既存施設の目標値は、2029（令和 11）年にコロナ禍以前の利用者数まで戻すことを目標に、基準値と同一の 364,395 人 と設定する。

【新規 2 施設】

2025（令和 7）年に新規開業する 2 施設については、まだ開業前であることから、それぞれの入館予測者数を目標値として設定する。

・ 忍者体験施設	<u>120,000 人</u>
・ 交流型図書館	<u>208,418 人</u>

【13 施設の合計】

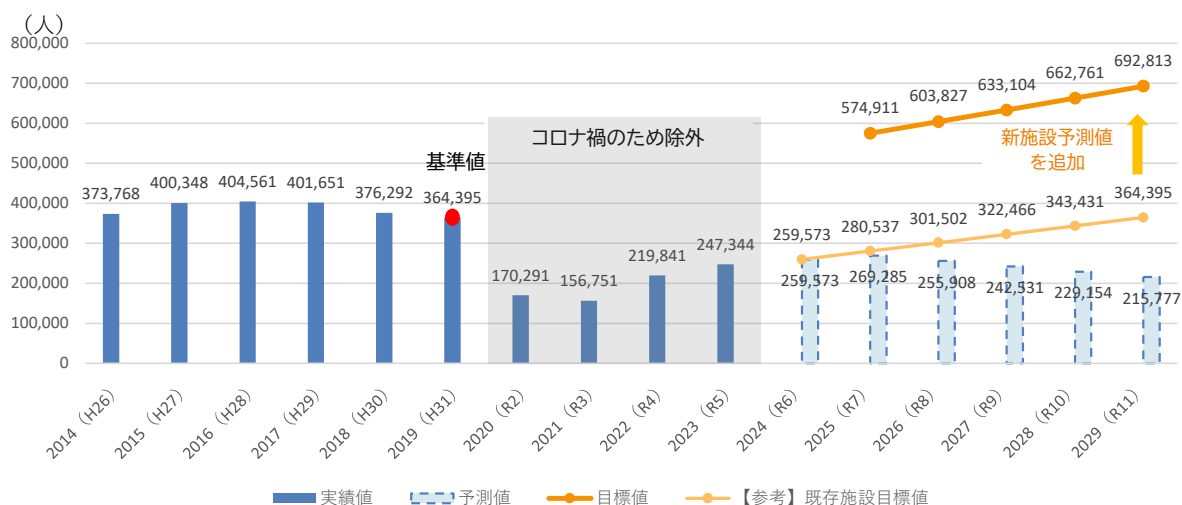
以上により、13 施設の合計の目標値は

$$(\text{既存施設}) 364,395 \text{ 人} + (\text{新規施設}) 120,000 \text{ 人} + 208,418 \text{ 人} = \underline{692,813 \text{ 人}}$$

となり、1,000 人未満の値を四捨五入した 693,000 人 を、目標値として設定する。

⁷ 線形近似：データの傾向を、一次関数を用いて近似すること

図 13 対象 13 施設の予測値と目標値



【基準値】
2019(令和元)年
364,395 人／年

【目標値】
2029(令和 11)年
693,000 人／年

2) 関連する各事業

○交流型図書館運営活用事業

○忍者体験施設運営活用事業

○にぎわい忍者回廊エリアマネジメント事業

「にぎわい忍者回廊整備事業」でにぎわいづくりの拠点として整備した施設を運営・活用し、より多くの新規利用者を獲得する。

○芭蕉翁関連施設運営活用事業

○文化振興事業（史跡旧崇広堂、赤井家住宅、入交家住宅の運営活用）

中心市街地の歴史文化施設において、より一層文化芸術に触れる機会を充実させることにより、さらなる利用者数の増加に寄与する。

○ユネスコ無形文化遺産 上野天神祭のダンジリ行事開催事業

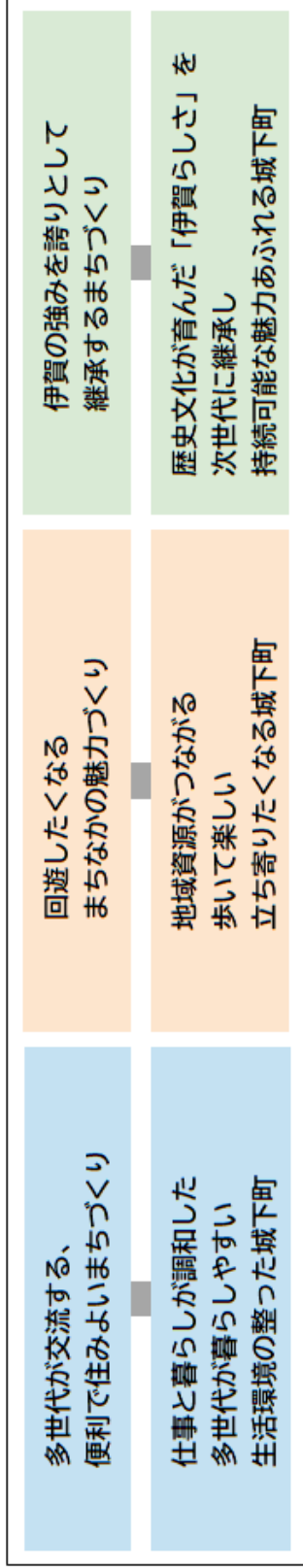
2016（平成 28）年に「山・鉾・屋台行事」の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録された国指定重要無形民俗文化財「上野天神祭のダンジリ行事」を開催し、次世代へと伊賀の歴史と文化を継承していくことにより、歴史文化施設の利用者数の増加に寄与する。

○ライトアップイベント「お城のまわり」開催事業

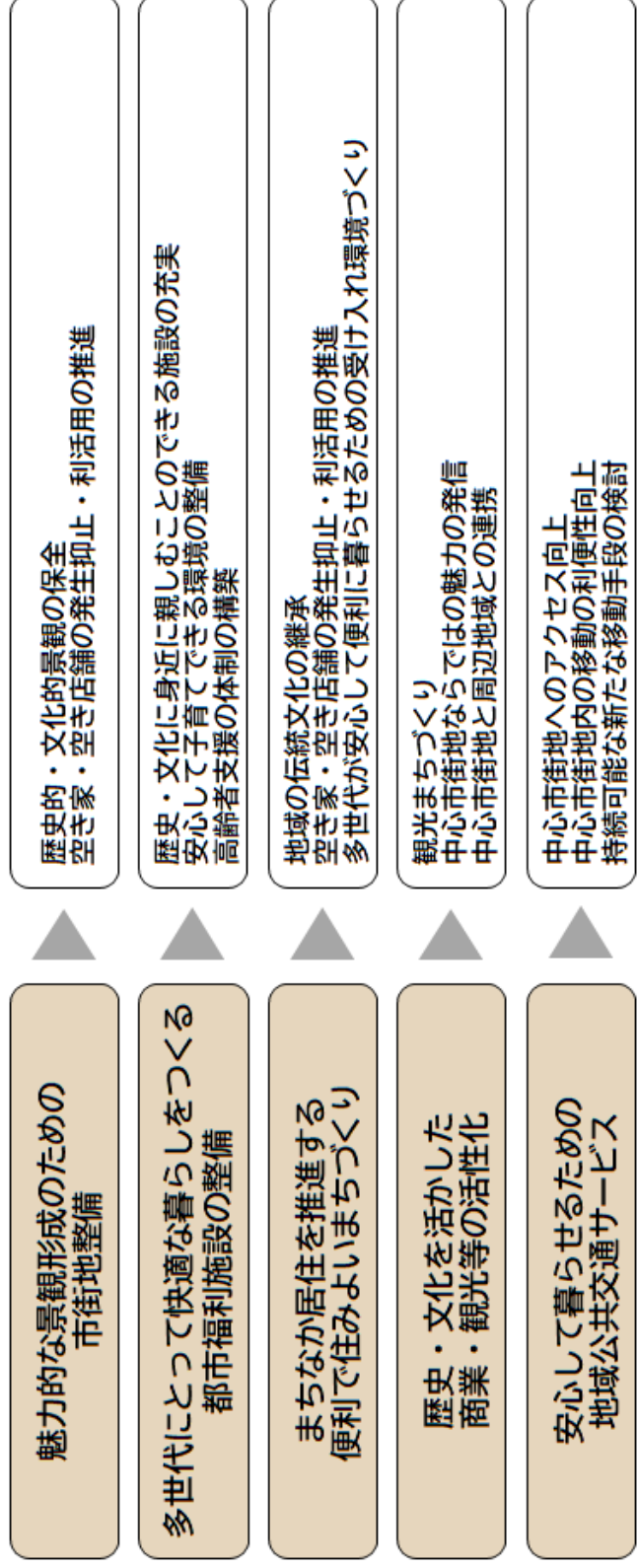
中心市街地の歴史的建造物をライトアップし、伊賀の素晴らしさを市内外からの来街者に体験してもらうことにより、歴史文化施設の利用者数の増加に寄与する。

城下町伊賀上野の文化・風土を市民で守り、次世代につなげ、新たなにぎわいを創出する。

■ 基本的な方針・目標



■ 取組の考え方



■ 基本的な方針・目標と取組との関連性

	多世代が交流する、 便利で住みよいまちづくり	回遊したくなる まちなかの魅力づくり	伊賀の強みを誇りとして 継承するまちづくり
	仕事と暮らしが調和した 多世代が暮らしやすい 生活環境の整った城下町	地域資源がつながる 歩いて楽しい 立ち寄りたくなる城下町	歴史文化が育んだ 「伊賀らしさ」を 次世代に継承し 持続可能な魅力あふれる城下町
魅力的な 景観形成のための 市街地整備	○	◎	
多世代にとって 快適な暮らしをつくる 都市福利施設の整備	◎		○
まちなか居住を推進する 便利で住みよいまちづくり	◎		○
歴史・文化を活かした 商業・観光等の活性化		◎	◎
安心して暮らせるための 地域公共交通サービス	◎	○	

※ 関連性の高い取組に「◎」「○」を付している。